

『愛の哲学』

「あとがき」

本文は、「青春の自省録」と題して、慶應義塾大学時代に、自分自身の内なる心の想いをまとめたものであった。縁あって、「愛の哲学」と題して、その中からそのままの内容のものを選び、収録した。

一行一行の背後には、私の生の実人生があるものであって、その中から培われた言霊であった。

しかし、日付を取り去ると、独り歩きをして、一つの人格をもって愛を生産してゆくものが多い。

愛の哲学には、限りがない。

未だ活字をつづる以前より愛の探究は始まり、活字をつづり出してからは、日記が本となって、形として身体をもつようになる。

今なお、私は愛について探究しつづけ、文章をつづりつづけているが、この基本姿勢は、終生変わることなくつづいてゆくことであろう。

人間は、愛なしには生きてはゆけない。よりよく生きようとすれば、その中に愛が必要となる。

この書も、数多くの方々の愛によって培われ、世の中に出ることになった。

そのお一人お一人に、深い感謝の念をもちたいと思う。そして、一人一人の幸福を願う。

読者の中で、私の生の言霊に触れて、何らかの愛を返したいと思われた方がおられたら、私の所に、お手紙なり、ご連絡なりを頂きたい。

それを新たなる出会いとして、さらに、愛について探究してゆく所存である。

一つの言霊は生きている。その中には、主として、十代後半から二十代前半の感受性の現れもある。

しかし、さらにいえることは、言霊そのものは、年齢を超えているということである。

古いアルバムとしてではなく、新しい作品として、当時の言霊が再現出来ることをうれしく思う。

地上に生きていたことの証は、一つ一つの言霊の中に永遠に刻印されている。

日記の中で、人は嘘などつけるものではない。

誰もが自分自身に向かって率直な問い合わせをなげかける。

その問いに、さらに年齢を経た自分が答えてゆくことで成長してゆく。

しかし、真心をこめて発した愛の響きは二度とはない。永遠の今がそこにある。

むしろ、その立場に立って、その当時の音楽を聴き、風景を思い出して、言霊の一つ一つを味あわなければならない、かけがえのない唯一無二の世界が、そこに展開しているのだ。

私の詩に心動かされる方は既に友人である。共に手をとりあって、よりよき現在をつくり、未来を拓いてゆこうではないか。

JDR総合研究所・代表 天川貴之